江戸医学における『医心方』の影写と校刻事業の経緯

矢数道明

一、はじめに

『医心方』は、すでにご承知の如く、丹波康頼の撰進にかかる、わが国に現存する最古の医書で、永観二年(西紀九八四)、時の円融上皇に献上された全三〇巻から成る一大医学全書である。今を去ること、まさに一千年前の出来事であった。

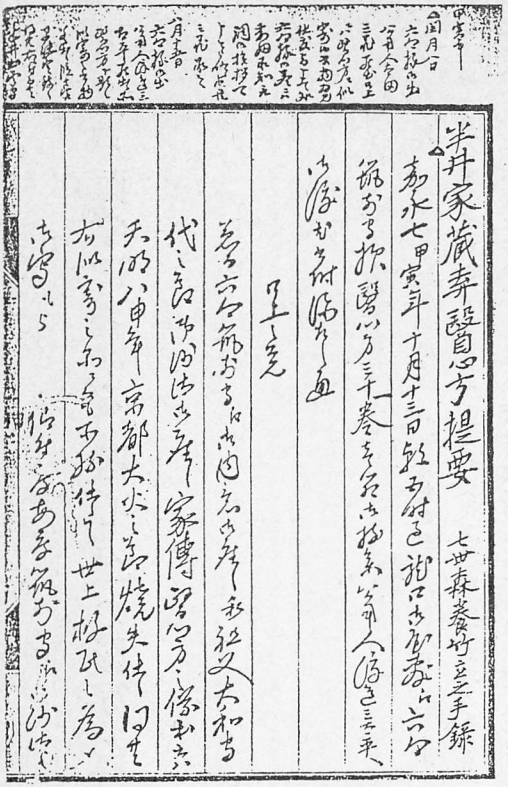
本書が、中国伝統医学の粋として、唐時代に誇る『千金方』『千金翼方』『外台秘要方』などに優るとも決して劣らない医学の宝庫であり、かつまた、日本漢方の黎明を告げる象徴と称するにふさわしい一大文化遺産であることは、もはや論を俟たない所である。

本書の重要性の第一は、中国中世以前の医学文献の失われた部分を大量に残存していること、その第二は、北宋の改修以前の旧態をそのまま保存していること、第三は康頼が独自の見識を以てこれを集大成していることである。

これほどの質量ともにまとまった、ほぼ原型の姿そのままが一千年後の今日まで伝えられたということは、仁和寺の『太素』などと共に、中国伝統医学史上、全く類を見ない驚嘆すべきことで、これは正倉院の宝物に代表されるように、歴史文化財の伝世保持という我国特有の伝統のみがよく遺し得た奇蹟ともいうべきものであろう。

幕末に隆盛を極めた考証学派の業績は、『医心方』の撰者、丹波康頼の血を引く多紀家を中心になされた。その江戸医学の人々が、原撰本である半井本の供出を願って画策し、その成功を喜び、その影刻本出版に当っては、いかに血のにじむような情熱を傾けたか、その実情を振返ってみる必要があると思われる。

近年半井本は、漸く半井家の手を離れて文化庁の所轄となり、撰進一千年目の今年国宝に指定され、あわせてこのたびの祭典が催されることになった。この慶事を機会に、江戸医学の人々が『医心方』に注いだ情熱と、その業績を再認識してみたい。



図一、『医心方提要』森立之自筆稿本

○

その実態を知るに当って、中心となる資料は、医学館において『医心方』校刻に終始努力した考証学派の奇才、森立之（一八〇七―一八八五）が克明に記録した『医心方提要』（図一）で、石原明氏の旧蔵による自筆本が、当時の状況を彷彿とさせる唯一無二の貴重な資料である。

このほか、松本一男氏所蔵の『医心方提要』の別本があり、これも森立之所蔵本であるが、内容的には資料ははるかに少ないものである。

二、多紀家の宿望

康頼の献上本は、久しく宮中に秘蔵されていたが、正親町天皇の時代（一五六〇―一五八六）に至って、典薬頭であった半井瑞策（光成）に下賜された。その詳しい年次や下賜の理由は明らかではない。

半井家は丹波家に匹敵する歴世の宮廷医家で、京都半井典薬頭の家系は連綿として明治維新に至るまで続き、『医心方』は同家門外不出の家宝として、代々護持されてきた。

○

江戸後期、名実ともに医界最高の座につき、栄光を放った多紀江戸医学の発端は、元孝（一六九五―一七六六）に始まる。元孝は吉宗将軍の御匙となり、明和二年（一七六五）官許を得て神田佐久間町に躋寿館を建て、全国諸医家の子弟教育に当った。二代目多紀元徳はかねてより『医心方』を探し求めていたが、はからずもこの年、積年の宿望の一つが叶えられた。御室仁和寺本の鈔写がそれである。

寛政二年、ときの老中松平定信から京都へ、『医心方』探索の令が発せられ、御室仁和寺にその古写本の存在が判明、仁和寺はその旨を承諾し、秘庫よりとり出された断簡二十三包が江戸へ送られ、元徳は幕命を奉じ、息子の元簡・元倓・元方、門人三好元栗を督励して二部を鈔写させ、一本を幕府に納め、一本を自家蔵とした。この幕府納本はいま、国立公文書館内閣文庫に現存している。

○

多紀家はこれに先だち、一時は姻戚関係を結びつつも、互いに宮廷と将軍家に仕える官医として宿敵ライバルの間柄にあった半井家に、『医心方』の完全帙本が伝存していることを仄聞していた。元徳らは幕命によってこれを提出させ、鈔写を企てたが、時の半井成美は頑として応ぜず、去る天明八年（一七八八）の京都大火によって焼失したと言い張り、幕

命にも応じなかった。

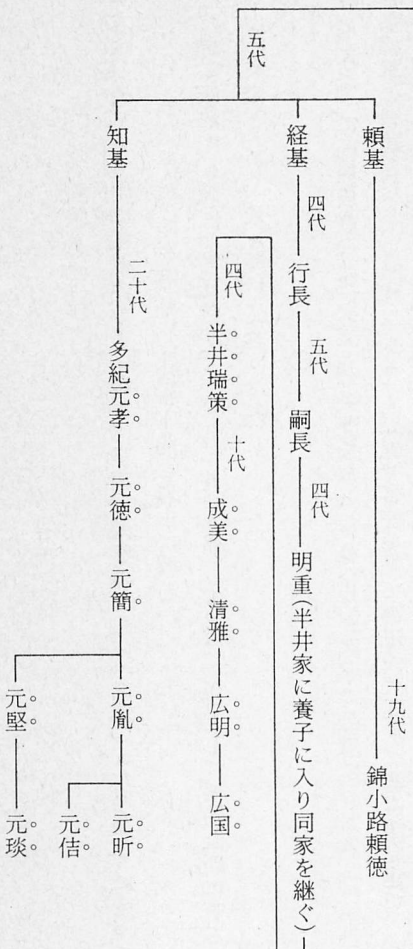
幕府は寛政二年（一七九〇）三月二十六日、半井成美に対し、「かねてより、その方の所持する『医心方』について尋ねしに、前後ふつつかなる答、その上、京都屋敷にて焼失したというもこれを届け出でざるは不埒至極なり」として百日間の出仕停止、閉門を言い渡した。

いま丹波康頼を祖とした多紀家・半井家・錦小路家との関係を略図表化したものを図二に示す。

○

寛政十一年（一七九九）元徳のあとを継いで息子の元簡が医学館を主宰することになった。元簡は機会あるごとに半井

図二、丹波康頼と多紀家・半井家・錦小路家との関係



家の『医心方』を虎視眈々として狙っていた。

文政年間（一八一八―一八三〇）に次のような事件が発生した。元簡と山本宗允の二人が、たまたま、半井家に養子に入った半井清雅の実父、相模守北條氏昉の脚気治療を任命された。元簡らは、脚気の治療は『医心方』に詳しい、よってこれを秘蔵している半井家より借り出して欲しいと、患者である北條氏昉に依頼した。氏昉は自分の病気のことゆえ、急ぎ息子の半井清雅にこれを伝え、脚気方の記載された『医心方』巻八の一冊を半井家より借り出すことに成功した。

元簡らは、しめたと思ったことであろう。すぐさま鈔写を開始したが、喜びも束の間、九枚目まで写したときに、北條氏昉は脚気が悪化して死去した。すると半井清雅は、もはや貸与の理由はないと、即刻これを引きあげてしまったのである。

多紀家が、いかに執念を以て、ことあるごとに半井家より『医心方』を手に入れようとしたか、この逸話はその実情をよく伝えていると思われる。

三、半井本の出現

文化七年（一八一〇）、元簡は、半井本借覧の念願を果すことなく世を去り、次の嫡子元胤も文政十年（一八二七）四十六歳の若さで元簡の後を追い、元胤なき後は、元簡の庶子、多紀元堅が医学館を主宰することになった。元堅は元簡に勝るとも劣らぬ豪傑鬼才の大人物であった。

元堅をはじめとする医学館の人々は、元簡・元胤の後を承け、広く善本秘籍を探索蒐集した。その所業は『経籍訪古志』となって実を結び、その優れた鑑識眼の卓絶さを後世に遺している。

嘉永元年（一八四八）元堅らは、米沢侯所蔵の宋版『千金方』三〇巻を開彫発刊した。残る最大の獲物、宿願半井本『医心方』に的を絞った。嘉永七年（安政元年）待望の半井本『医心方』が、俄然その姿をあらわすことになる。そのため、四年をかけ版下を完成した宋版『外台秘要方』の出版は断念せざるを得なかった。半井本『医心方』は多紀家にとって、

何ものにも替えがたい魅力的なものであったのである。

○

ここで半井本搬出をめぐる舞台に踊る主要人物を紹介しておく必要があろう。

(1) 半井広明（出雲守）

六郷政秦（大和守）の三男で、半井家に養子に入り、清雅の後を継ぐ。寛政二年に提出を拒否して処罰された成美から三代目。

(2) 六郷政殷（筑前守）

六郷政秦の曽孫に当り、半井広明と姻戚。

(3) 阿部正弘（伊勢守）

天保十四年から安政四年まで、十四年間老中の座に在った、福山藩守で、森立之は福山藩の医員として仕えた。

(4) 渡辺三太平

阿部正弘の公用人、森立之とは同藩の誼交。

(5) 遠藤胤統（但馬守）

若年寄、老中に次ぐ重職にあって、幕府の窓口として、直接医学館を監督していた。

○

嘉永七年（一八五四）（この年の十一月二十七日改元して安政元年となる）

二月末、老中阿部正弘邸に六郷政殷が出頭し、『医心方』周旋を内談協議し、これが発端となる。

三月上旬、半井広明の参府が決定。

四月中旬、半井広明、同家の江戸屋敷にて、『医心方』の提出を承服。

以後、夏から秋にかけて、阿部家公用人渡辺三太平と六郷政殿との間に折衝があり、十月一日、多紀元堅が、政殿と直接面会して最終の固めを行った。

○

嘉永七年十月十三日、ついに待ちに待った『医心方』半井本披見の日がやってきた。

朝五ッ時（八時）過ぎ、六郷政殿は『医心方』三十一巻（巻二十五に二種類のテキストがあった）一箱を、若年寄遠藤但馬守邸に持参、老中阿部正弘公用人、渡辺三太平に、半井広明からの書付一通を添付して、これを手渡した。その口上の覚え書は実に興味深いもので、これを現代語に訳すと次のようになる。

かねて六郷政殿殿より、内々に打診を承って居ります件、すなわち私の祖父成美の代に御沙汰のあった家伝『医心方』ですが、本書は天明八年の京都大火の際に焼失してしまいました。ただ似よりの品を所持致しておりますので、人民救済のためとあれば、六郷殿よりのたび重なる要請ですので承伏いたします。書名は同じく『医心方』となっておりますが、筆も所々異なるところがあり、誤字や脱字もあり、甚だ信頼のおけぬ粗末な本で、お役に立ちませぬでしょうが、ご所望のことゆえ、全部で三十一巻、六郷殿を介して御覧に入れます。委細は六郷殿より申し上げます。

以上

十月十三日

半井出雲守

○

このようにして、午前八時過ぎに遠藤但馬守の辰の口邸（浅草絵図によると嘉永六年刊辰の口は金龍山浅草寺の真裏にあった）に届けられた『医心方』は、同日巳の刻（午前十時から十二時まで）から、未の刻（午後二時から四時）にかけて、並居る医学館の人々に披露された。

半井家としては、以前成美の代に、天明の大火で焼失したと偽った手前、「似よりの品」と称するしかなかったが、実に期待に背かぬ古鈔の善本であった。一同狂喜雀躍したことは言うまでもない。

森立之はこのとき感慨をこめて次のように記し、一詩を賦した。

甲寅（嘉永七年）十月十三日、医心方三十一巻、辰之口邸内の小書院にて、同僚とともに拝披撫玩すること已より未に至る。実に八百年前の旧抄なり。抃喜（手を拍っておどり喜ぶ）の余り、賦して一絶を得たり。

小春奇暖、書堂に満つ。
心、梅花と共に自ら狂わんと欲す。
馥郁たる古香、君怪しむこと莫かれ。
繙披す、三十一巻の医心方。

梅花は多紀家の紋所にかけたもの。喜びに乗じ、一行は群をなして元堅の別邸三松書院に赴き、『医心方』出現の祝賀の宴を開いた。

席上の各位十三人

多紀元堅、多紀元昕、多紀元佶、山崎宗安、小島春沂、辻元崧庵、山本順庵、渋江抽斎、伊沢柏軒、稲葉元熙、堀川舟庵、森　立之

そして立之は『医心方』三十一巻と、その披見者十三名を対比して一句を作った。

見る人の数より多しかへり花

元徳・元簡・元胤が果たせなかった夢は、かくして現実のものとなったのである。寛政二年より六十余年の歳月がすでに過ぎ去っていた。

立之の子、約之は、その功三卯にあるとした。即ち、

阿部正弘　文政二年己卯の生（一八一九）
多紀元堅　寛政七年乙卯の生（一七九五）

図三、岡西玄亭詩

森　立之　文化四年丁卯の生（一八〇七）

○

更に岡西玄亭の一詩がある（図三）。

秘玉突然、櫝（木の箱）を開きて出づ。
瑩光明徹して点瑕（玉の傷）無し。
金龍山の畔に波濤起こり、
龍口始めて、是に此の珠を探る。

金龍山は浅草寺、金龍山畔とは六郷政殷の屋敷のことで、同邸が浅草寺の真裏にあったからである。龍口は辰の口、即ち、『医心方』が初めて披露された遠藤胤統邸を指している。今の麹町永田町に当る。岡西玄亭は伊沢蘭軒の門下で、いわゆる蘭門の五哲の一人で、渋江抽斎の義兄に当る人物。

四、摸鈔本の作製

医学館首脳部は、急ぎ影写についての規則を協議した。『提要』には喜多村直寛自筆の草案が綴じこんである。十六項目に亘って心得が列挙され、その中に、丹波康頼の霊前に香花を供え、朝夕礼拝すべきこと、という一項がある。その他こまごました規則が提案され、興味をそそられる。また終りの方に、「書写中、猥談・剰語堅く禁じ候こと」という一項がある。医心方中の房内篇の鈔写に当って、人情の常として必ずや起るべきことを事前に釘をさしたものとして肯かれる。

影写作業に参画したメンバーは、総裁二、校正七、監理四、写手十六の総勢二十九名、いずれも名家の血筋を引いたも

のばかりであった。

安政元年十一月一日より開始し、影写再校の終ったのは十二月七日で、六年後半井家に返却の際にも詳細な校合がなされた。

現在この江戸医学館影写本は、宮内庁書陵部に現存している。私はこのたび、大塚恭男、小曽戸洋の両氏と共にこれを披見させて頂いた。ことごとく原本の真を仿製したもので、医学館の面目躍如たるものがある。

五、校刻出版

早速版下の製作が開始され、小島春沂は、「医心方縮刻程式」という版下作製要項を草して、書家渡辺源三にこれを指示した。

半井家には別に、延慶二年（一三〇九）の書写による冊子装の古写本があった。脚気治療のとき元簡が、その巻八を借り出したものである。

この延慶本の末尾の識語によって、それまで不明であった丹波康頼の没年月日と享年が判明した。長徳元年（九九五）四月十九日逝去、歳八十四と記録されている。

○

安政四年（一八五七）不幸な出来事が次々と重なった。多紀元堅、元昕、小島春沂が他界し、翌安政五年渋江抽斎が五十三歳でコレラで斃れた。抽斎は死ぬまでうわごとで『医心方』校合のことを口走っていたという。『医心方』校刻に心血を注ぎながら、晴れの日を迎えることなく世を去った人々の、無念の思いは察するに余りある。

これによって安政六年におけるメンバーの大半は一新し、県玄節（あがたげんせつ）、浅田宗伯らが参加した。

この『医心方』の版木は、維新後、医学館とともに新政府の管理下に入り、いま東大の所有となっている。大正十二年

の関東大震災で、その大半は焼失し、或はその際、バラックの屋根や燃料にも供されたといわれているが、私はこのたび、大塚恭男、小曽戸洋両氏と共に、東大附属図書館において、残された僅か四十三枚、両面八十五頁分の版木を確認することができた。

○

功労者への褒賞十三名

半井山城守（広国）　銀二〇枚　時服二
多紀安琢　充　奥医師　銀二〇枚　時服二
多紀安常　充　奥医師　銀二〇枚　時服二
伊沢磐安　奥医師　銀一〇枚
舟橋宗春　銀一〇枚
高橋久貫　銀一〇枚
森　養竹（立之）　銀一〇枚
佐藤玄蓑（元蓑）　銀七枚
清川玄道（玄策）　銀五枚
県　玄節　銀五枚
浅田宗伯　銀三枚
橘　宗俊　銀五枚
渡辺源三（没後でその子）　銀十五枚

九月二十八日、元佶は、関係者三十余人を招待し、刻医心方完成大祝賀会を主催した。嘉永七年十月、辰ノ口邸で、は

じめて『医心方』を披閲してより七年、医学館の歴史上、最大にして最後の大事業がここに成就したのである。

しかし皮肉にも、その華やかさは、恰も燃えつきんとする燭光の輝きに似て、その後八年、明治維新を迎えて、漢方医学は急転奈落への道を辿ることになった。

明治十四年、駐日清国大使の随行員として来日した、清朝考証学の異才、楊守敬は、この『医心方』を見て驚嘆し、その著『日本訪書志』に次のように誌し、これを中国に紹介した。

「其の書体に至りては秀逸にして、古香挹む可し。その影写手、渡辺源三、また一時の絶技なり。刊刻の精、校訂の密、当さに日本摸刻古書の第一と為すべし。その載するところの校刻職名中、森立之、浅田宗伯の如きは、今巍然として猶お存す。皆群書を博覧せること、中土方今の医家の未だ有らざるところと為すなり」(抄訳)と。

考証学者であり、当時中国きっての書道家として、我国現代書道界にも絶大な影響を及ぼした楊守敬をして、かくまで激賞せしめたことは、まさに日本の誇りであり、七年に亘る努力が遺憾なく酬いられたもので、以て瞑すべきことと思われる。

六、おわりに

森立之は晩年の明治十四年春、過ぎ去った昔を偲びつつ、『提要』をひとり読み返し、嘉永七年、元堅の三松書院で、十三名揃って『医心方』出現の祝賀宴を開いたときの、今は亡き同僚の顔を想い起こし、朱筆をとって余白に書き記した(松本氏所蔵の『提要』にある)。

十三名の諸君、皆物故されて、吾一人生き残りければ

「月更けて独りになりぬ花の下」枳園

月は十二(三)の数に、花は多紀家の絞所梅の花に擬したものであろう。

彼が将来を嘱望した最愛の息子、約之もすでにこの世にない。立之は漢方衰微一途のこのとき、将来における自分達の業績の再評価には、全く期待を持てぬ気持であったろうと思われる。

ところがこの句を読んだ年から、奇しくも百年を経た、昭和五十六年、『提要』は、石原明氏の提供によってその大略が、東京大学史料編纂所の『大日本史料』第一編に収録されることになった。立之の意図はここに完全に果されたというべきであろう。

そしていま『医心方』撰進一千年を迎え、記念会が組織され、日本医史学会と日本東洋医学会後援による記念祝典が開催され、これと時を同じくして、「医道顕彰会」が発足し、京都東山区、西国十五番霊場、観音寺境内に、朱色華麗、金色燦然たる医聖堂が建立。その医聖堂の下に、渡辺源三の筆跡を拡大し、大自然石に刻まれた丹波康頼『医心方』一千年記念碑が建立された。昭和後期を彩る世紀の記念事業と思われる。

半井本、国宝『医心方』も近い将来影写出版され、「医心方」研究会が新しい企画の下に設立されるときくが、ここにはじめて、江戸医学の人々の苦心の結晶は、みごとに開花し実を結ぶことになるであろう。

〔追記〕

本稿は、北里研究所附属東洋医学総合研究所、医史学研究室の小曽戸洋氏の努力に負うところ大である。その全文は多くの資料、写真と共に、共同研究として、『漢方の臨牀』誌（第三二巻・二号）に一括掲載した。講演の際には資料のスライド二十七枚を紹介したが、本稿では三枚だけを掲げた。

The Faithful Copy of the "Ishinho" by the staff of the Yedo=Igakukan Medical Academy

by

Domei YAKAZU

The "Ishinho", the oldest extant medical work in Japan, was written by Yasuyori Tanba and dedicated to the Emperor En'yu in 984 A.D. During the reign of the Emperor Ogimachi (1560-86) it was presented to Dr. Nakarai, a member of the most influential family of court physicians at that time.

After that it was held in keeping for many years in the family Nakarai. The Yedo-Igakukan Medical Academy, presided over by members of the family Taki, descendants of Yasuyori Tanba and another influencial family of court physicians family, wanted to borrow and read the original text of the "Ishinho" because of its unsurpassed value in the bibliographical study of medicine. But this request was refused due to strong opposition from the family Nakarai. The Yedo-Igakukan then took advantage of its governmental authority to move the Tokugawa Shogunate Government to succeed in finally borrowing the original text of the "Ishinho" in 1854. After a faithful copy of the original text had been made by the working staff of the Academy, the Yedo-Igakukan published the facsimilie edition in 1860, probably the largest and final undertaking by the Academy. Risshi Mori, a member of the working staff of this project described the process in detail in his book "Ishinho-Teiyo". It is the present author's intention to try to describe this project with reference mainly to the "Ishinho-Teiyo".